

第 10 回 同 窓 会 報

〒564-8680 吹田市山手町 3 丁目 3 - 35

☎06-6368-1121 内線5840

同窓会編集委員会 発行



《《 卷 頭 言 》》

キャリアデザイン教育めざして

化学工学科 教授
室 山 勝 彦

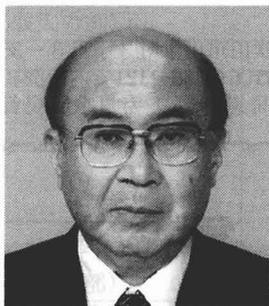
今年度就職担当をしていますが、学部卒業生の就職状況は、率直に言って良いとは言えません。これは、大企業・中堅企業では、学部卒業者を長期に訓練して育てるより、能力の高い中途採用者含め、キャリア重視、能力的に高い人材を厳選して採用するように方針変換したことです。特に化学系では研究開発、生産技術分野での修士課程以上の採用が主体となっており、修士卒業者が有利です。一方、学部卒業者の技術者としての求人が減少して、営業職などにウエイトが移ったことが特徴です。

みなさんはキャリアデザインという言葉をお聞きになったことがあると思います。大学では、一昔前までは幅広い教養を身につけるといふ教養主義で良かった。これは就職状況が良かったからです。これからは大学でキャリアについて考え、卒業、転職などの人生の節目で満足できる職業選択ができ、自分の将来の職能（職業生活）を地道に設計してゆく能力が必要とされる時代になっています。つまり、大学を出るだけで一流企業に就職できる時代ではなくなったこと。一流企業においても終身雇用で定年まで安定な生活ができるという保証がなくなり、リストラなど不安定な状況の中でいかに職業生活を満足できるものとして送るかを常に考えなければならなくなったということです。卒業生の中に転職する事例も多くなっています。しかし、転職に至ったとしても、キャリアさえあれば心配ないのです。人材バンクへの登録や派遣職を経由して、その人の積み上げた技術的な能力が認められ、キャリアアップとなる事例も珍しくありません。

ちなみに、本年度化学工学卒業者で弁理士試験の合格者が、花田考侍（86G）、小山 靖（94M）、大洞正嗣（95G）の3氏にのぼります。これらの諸君の今後の活躍を期待します。

また卒業生諸兄の御活躍を心より願っております。

退官に際して



工学部発足のころの思い出

関西大学工学部化学工学科 教授
植村 正

私が大阪府立大学からこちらの大学に変わって来ましたのは、昭和36年の4月でしたから、もう42年になります。月日の経過するのは、まことに早いものだとつくづく思います。私が関西大学に来ました当時の工学部の学舎は、第4学舎の1号館（事務室のある建物です）とトタン屋根の平屋の実験棟と同じく平屋建の製図室でした。学科も機械、電気、化工、金属の4学科のみで助手の先生方を入れても先生の数も少なく、まことにこじんまりとしていました。千里山の方には教室がなかったものですから、天六学舎で講義が行われました。学生諸君は大体午前中は天六学舎で講義を聞き、午後は千里山学舎の実験棟で実験をすることになっていました。天六から千里山への移動ですが、教師は阪急千里山線で移動し、学生諸君は大学がチャーターしたバスで移動することになっていました。ところが当時は長柄大橋が交通のネックになっていて、ここで渋滞が起こると、バスが動けなくなり、昼からの実験開始時間に間に合わなくなることがしばしばでした。このせいで実験開始が遅れ、実験終了も夜遅くなるといった具合でした。

私がこちらの大学にきた年から第1回卒業生の卒業研究が始まりました。4年全員に卒業研究をやらせるのですが、なに分にも予算がほとんどありません。当時の化学工学科は研究室が8つあって、そのうち6つは応用化学系で、あと2つが化学工学系でした。私の部屋（本当は柳場先生の部屋ですが）はこの2つのうちの1つでした。設備も金もないので、学生5人のうち、1名だけ大学で実験をやらせ、あと4人は会社との共同研究ということで（現在では会社との共同研究はめずらしくありませんが、当時ではあまりよいように思われませんでした。）、会社内に実験室を用意してもらい、予算も計上してもらって実験をいたしました。もう1つの研究室は化学工場のプラントの設計計算を卒研生に分担させてやらされ、計算結果にもとづいて小さな木製の模型のプラントを作られて、卒業研究とされました。先ほど工学部の学舎がわずかなものであったと書きましたが、他学部の建物もわずかなもので、そのかわり昔の千里山の面影がいたるところに残っておりまして、昼の時間には散歩がたのしめたものです。当時の学生諸君は今と違って、あまり教員と年齢差がないためか、考え方に相通ずるところがあり、実によく働いてくれました。この人達が今では各学科の中心的な教授になっておられます。

当時の大学進学率は11.8%だったそうですから、優秀な人が多かっても当然かも知れませんね。また、当時の学生さんは地方出身の人が多く、素朴な性質の人が多かったように思います。翌年、大学院の修士課程が開設され、昭和38年に機械工学第2学科と応用化学科が設置され、化学工学科と応用化学科が分離しました。阪急千里山線が南千里まで延長、開通したのはこの年です。その結果、千里山沿線の都市化も推進されたように思います。この頃から我国は高度成長時代に突入し、大学進学率も急上昇するようになり、我国の私立大学の経営状態もよくなったように記憶しております。なぜなら、私が関西大学に来ました昭和36年には、私は同級生中で最も給料が低く、大学の教師の給料は低すぎるとなげいたものでしたが、たしか、その後、2～3年でかなりよくなったことをおぼえているからです。管理、電子、土木、建築などの学科が増設されたのは、これよりあとの話になります。



植村教授のご退職に際して

昭和42年卒業（化学機械[(現)低温化学工学]研究室）
有限会社 ジェイコフ 代表取締役
砂 村 梅 晴

私が関西大学工学部化学工学科に入学致しましたのは昭和38年でしたが、この度植村教授が長年ご勤務された関西大学を平成16年3月をもってご退職されますが、私が在学当時化学工学科に在職されていた先生方が全員退職された事になり、やはり寂しい気が致します。私が入学した当時は日本の経済も上昇を始めており、国内外で石油プラントを始め各種のプラント建設が行われており、その様な環境下において化学工学の重要性は増しておりました。

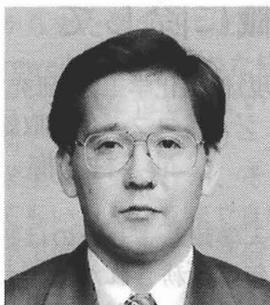
私が入学当時、植村教授は専任講師を勤められており、講義を受けましたのは2年及び3年時の専門科目「単位操作及び演習Ⅱ及びⅢ」でありました。そして教科書は「化学機械の理論と計算（亀井三郎先生著）」を使用されました。この中で流動・伝熱・蒸発・蒸留・乾燥・調湿等の講義を受けましたが、私にとりましてこの講義はその後本学を卒業し、熱交換器等を製作しているメーカーに就職して後、現在に至るまで非常に役立っております。現在はプラント及び機器の設計会社を経営しておりますが、「化学機械の理論と計算」は会社の私の書棚に置いて今でも使用しております。この本を開ける度に植村教授に講義を受けた当時を思い出しております。その様な訳で、私の仕事の基礎は植村教授の「化学機械の理論と計算」で有ると感謝致しております。

4年になりまして選択致しました研究室は「化学機械研究室」でした。当時、本研究室は榑場教授と植村助教授によって吸収式冷凍機に使用される冷媒及び吸収剤の特性研究を行っておられました。しかし私が「化学機械研究室」のお世話になった時には榑場教授は引退され本研究室は植村助教授の研究室となりました。従いまして「化学機械研究室」に於いての植村研究室としては私共が第1期生と言うことになります。その当時の研究室は第4学舎2階の一番奥の左側に有り、広さも現在の研究室よりかなり狭かったように記憶しております。私に与えられた研究テーマは「R22-E181系及びR22-ジブチルフタレート2段式吸収冷凍機の動作特性」でありました。最初は吸収式冷凍機についてほとんど分からない状態で研究をスタート致しましたが、研究室での1年間は大学生生活での良き思い出になっております。

大学を卒業して就職してからも現在まで何かと植村教授にはお世話になっておりますが、最近では数年置きに植村教授もご出席いただき、その当時の研究室のメンバーが集まって同窓会を行い、学生時代に戻って親交を深めております。植村教授は今年3月付けをもってご退職されますが、我々植村研究室一期生もこれから会社の定年を迎えて行く時期に来ております。これからは第一線を退いても、現役時代とは又違った気楽な気持ちでこの同窓会を続け、益々親交を深めて行きたいと思っております。その時にはお元気なお姿でお会いするのを一期生全員楽しみにしております。

植村教授の今後のご健勝を心よりお祈りさせていただきます。

25年後の夢



昭和54年卒業（化学機械[(現)低温化学工学]研究室）
（株）リッキドガス産業・エネルギー部
坂本 一郎

私が学部生として、植村先生のご指導を頂きました昭和53年4月当時の研究室のテーマは、吸収式冷凍機COPの向上を目指した3成分系の吸収剤検討、再生器の腐食抑制に適したインヒビター選定そして鶏肉の品質劣化スピード抑制に適したCA貯蔵でした。けっして広いとは言えない研究室の中で講義の合間のご指導により実験計画の策定、実験の基本習得、レポートのまとめ方など何事に対し取り組むに当たっても基本習熟の重要性を最低限会得できたと思っています。（先生の意図は、これ以外にもたくさん有ったかもしれませんが…。）

入社先及び現在の出向先の会社が、エネルギー業と言うこともあり、研究室テーマに関連した商品を間接、直接的に扱う職場に25年間在籍し、大学に近いこともあり何度か大学にお伺いし先生のお話をお聞きする機会がありました。その度に植村教授は、ご多忙にも関わらずいつも色々なテーマに話が及びあつという間に2、3時間が経ってしまいました。

今回先生が3月末を以ってご退職されるとの話をお聞きし卒業後25年という時間の経過を改めて認識した次第です。その経過の中で、研究室テーマに関連した技術・商品の状況・発展の一端を簡単にご紹介させていただきます。

昭和40年代半ばに商業ビルで初めて吸収式冷凍機が稼動し、その後二重効用式登場と夏場の電力ピークカットの一翼を担うとの省エネルギーニーズに合致した結果、吸収式冷凍機の普及状況は、全国累計で7,742千RT（平成14年度末：日本ガス協会ホームページより）にもおよび殆どの著名な大型ビルでは吸収式冷凍機が導入されています。また、インヒビター技術の進展により冷凍機の耐久性が飛躍的に向上し工場、ホテル、病院など設備稼働時間の長い建物でも採用されるようになり、また、省エネルギーの切り札として注目されているコージェネレーションの排熱利用設備・エネルギー変換設備としてますます注目されています。このように日本全体の省エネルギーやエネルギーの平準化に寄与する設備として吸収式冷凍機は、確固たる地位を築いています。

一方、CA貯蔵技術は、炭酸ガス、窒素ガス及び酸素ガスの濃度・組成を制御することで様々な用途開発がなされ炭酸ガス添加による渋柿の渋抜き、輸入バナナ熟成、りんごの品質保持、各種野菜の鮮度保持に応用されているなど身近な技術として生活に浸透しています。

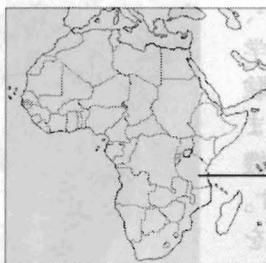
大学で保有する知的財産の社会での有効活用を目的にTLO設立・ベンチャー支援促進など国の施策の進展を受け“関西大学工学部の25年後の夢”を今後入学される方、在学生、卒業生、教授の皆様と語り合える日を楽しみに致しております。

タンザニアでの2年間

平成8年卒業（炭素材料〔(現)エネルギー材料〕研究室）
（株）松村石油研究所 本社研究所
藤本理絵

平成10年に大学院を修了し、松村石油研究所に入社いたしました藤本と申します。3年半、勤務したのち、今しかできないことをやりたいと思い、青年海外協力隊に参加することを決意し、会社のご好意により休職という形で、実現いたしました。職種は理数科教師で、赴任地は、タンザニアです。（地図参照）。

協力隊では、赴任前に訓練所で3ヶ月の研修があります。これは、一言でいうと体力増強と隊員になるための知識、語学力を伸ばすためのものでした。毎朝のマラソン、ラジオ体操から始まり、一日中、語学、および模擬授業。平均睡眠時間3～4時間と受験生さながらの勉強の毎日でした。



さて、タンザニアまでは、最短で丸一日、もしくは2日かかります。タンザニアにさしかかると、キリマンジャロの頂上雲の上から顔をだして、迎えてくれます。さすが、アフリカ最高峰。その景色とアフリカの広大な台地と空に、まずは圧倒されてしまいました。

タンザニアは、日本の約2.5倍の国土を持っていますが、人口は、日本の約1/4ほどです。農業国であり、キリマンジャロ山をはじめとし、セレンゲティー、ンゴロンゴロ国立公園といった自然の宝庫でもあります。100以上の部族からなる多部族国家であり、イスラム教、キリスト教、その他の宗教徒が暮らしていますが、基本的に仲がよく、よくテレビでみかけるような、部族や宗教の争いはありません。しかし、GNPが約200ドルといわれ、途上国の一つです。日本からは、教育、医療、環境、インフラ等へ支援が行なわれています。

タンザニアでは英語とスワヒリ語が公用語です。市場や日ごろの生活ではスワヒリ語が主流なので、タンザニアでの生活を楽しむにはスワヒリ語が必須です。最初は挨拶もろくにできず、呪文のように聞こえたスワヒリ語も、おしゃべり好きのタンザニア人のおかげで、日常会話は、あまり困らなくなりました。タンザニアでは、定価がないので、なんでも交渉です。タクシーにのるのも、トマトを買うのも。おかげで、かなりずぶとくなっていました。

タンザニア人は基本的に素朴で優しい人が多いです。おしゃべりが大好きでよく日陰や店先でおしゃべりをしています。挨拶がとても大事で、なにを話すにもまず挨拶から始まります。スワヒリ語は、語彙はそれほど多くないのですが、挨拶に関する語彙は多く、また挨拶や他人への気配りがとても大事な文化で、とても気に入っていました。タンザニア人は白い歯をにっこりだして、よく笑います。笑顔がとても素敵でした。特に子供は、とてもいい目をしていて、かわいかったです。

アフリカは、どこも年中暑いと誤解されている方もおられますが、タンザニアの気候は海岸沿いと内陸では大きく異なります。海岸沿いは基本的に年中暑いです。特に12月から3月にかけては毎日とても暑いです。湿度もかなり高いです。内陸部は年間でかなり気温の差があり、場所によっては、暖房設備があるほどです。

タンザニアの学校は、7, 4, 2, 4年制です。小学校から中学校への進学率が約10%、高校への進学率が約5%と言われており、たぶんにもれず学歴社会です。小学校教育は、スワヒリ語で行なわれますが、中学校からは、教科書、授業は、英語になります。しかし、低学年では、英語が十分に通じないので、スワヒリ語も併用しなければなりません。この2年間のおかげで英語は上達しましたが、スワヒリ語とのミックス英語になってしまいました。私の赴任先は首都から約400km北上した海沿いのタンガ市で、日本の中学校にあたる学校で指導にあたりました。

人口20万の地方都市で、学校は、町の中心部に位置していました。ムクワクワニセカンダリースクールといいます。全校生徒約800人です。担当は、化学で、全学年指導しましたが、中心は1年生と3年生でした。化学の内容は、日本とほぼ同じで、実験器具の名前を覚えるところから始まり、物質量、中和、化学平衡、有機化学といったところまで勉強します。日本語でも教えるのは難しい分野を英語とスワヒリ語で教えるのはさらに大変で、実験をなるべく取り入れ、



目で見て、身体で感じる授業にしようと自分なりに努力してきました。2年と4年次には、国家試験があり、2年のそれでは、パスしないと上の学年にあがれませんし、4年では、その結果によって高校への進学が決まります。4年次の試験には筆記テストだけでなく実験の試験もあるので、その対策も行なわなければなりません。しかし、生徒は、みな実験が大好きな生徒ばかりで、実験の授業時には目を嬉々として行っていたのが印象的でした(写真は中和滴定の実験。生徒は、目盛りを読むのに四苦八苦)。

この2年は、長いようで、とっても短い期間でした。特に帰国前は、仕事が山積し、十分に友人たちとの別れを惜しむまもなく帰国の途につきました。協力隊員として、教師として、タンザニアの子供たちや人々とのふれあった経験は、私の人生にとっても大きな影響を与えてくれました。色々な立場の、異なった考え方をもつ人々や、雄大な自然、動物たちとの出会いは、私にとって宝物です。たくさんの失敗をし、そのたびにタンザニア人に助けをもらい、人間として忘れてはならないもの、人間として大事なものをたくさん教えてもらいました。

化学の分野に一人でも興味をもってもらいたいという目標をもって、タンザニアに渡りました。その思いがどこまで通じているかは、生徒が大人になる数年後でないとわかりません。「私は、日本に帰って、化学の仕事が続けていきます。皆さんはタンザニアで、化学の勉強を続けてください。いつの日か、世界のどこかであなたたちと再会し、化学について、同等の立場で意見を交換できるようになるのが、今の私の夢です」と最後の授業で生徒と話しました。この夢を実現できるよう、私もこれから、再度会社に復帰し、頑張っていきたいと思います。

最後になりましたが、私の学校の生徒たちは、まだ恵まれている生徒が多かったのですが、一般的に教科書は持っていません。そのため、小田教授を始め、研究室のOB、OG、後輩の皆様から毎年寄付を頂き、参考書の購入にあてさせていただきました。この場をお借りしてあらためて御礼申し上げます。

教室だより

カナダ・カルガリー大学語学セミナー



平成3年博士課程後期課程修了
関西大学工学部化学工学科助教授
池 永 直 樹

私は平成15年4月より工学部選出の国際交流主事として、教育研究ならびに学習における国際交流を促進することを目的に設置されている国際交流センターで、国際交流に関わる様々の事項について議論させていただいている。その国際交流センターの業務の一つに春休みおよび夏休み期間中に開催される5つの語学セミナー（英語：マンチェスター大学（イギリス）、カルガリー大学（カナダ）、アデレード大学（オーストラリア）、ドイツ語：ゲッティンゲン大学（ドイツ）、中国語：復旦大学（中国））があります。今回、2003年7月31日から9月1日まで開催されましたカルガリー大学での語学セミナーへ参加する20名の学生を引率するという仕事を仰せつかりました。引率は二人で前半と後半に分けて行きます。私が担当したのは後半部分（8月16日から9月1日に帰国するまで）でした。この引率期間中の様子をレポートさせていただきたいと思います。参加した学生の感想は国際交流センターが発行している「A Tiny Ripple」という冊子（<http://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/html-j/news/tiny.html>）に掲載されておりますので、興味のある方はご覧下さい。

私の担当は後半でしたので、関西国際空港から8月14日午後6:30に出発するはずでした。ところが激しい雨のため空港が閉鎖され、出発が3時間ほど遅れました。当然、バンクバーで乗り換えるはずであったカルガリー行きの便には間に合わず、搭乗便の変更を余儀無くされました。このときは私一人だったので、搭乗カウンターに並んで新しいチケットを手に入れ、予定より7時間ほど遅れて無事カルガリーに着くことができましたが、もし、これが英語をまだよくしゃべれない学生と一緒にあったらと思うとぞっとしました。

語学セミナーは語学力によってレベル別に2つのクラスに分かれ、月曜日から金曜日まで午前3時間、午後2時間の授業（引率者も学生と一緒に授業に出ることも可能）が行われます。その他にキャンプ、Horseback riding、アイススケートや博物館見学など数多くのエクスカッションが企画されていきました。引率者の業務は毎日大学へ行き、学生たちの健康状態のチェックや授業などに対する希望・意見をカルガリー大学側へ伝えることがありますが（個人的には学生も子供ではないので、そこまで手取り足取り世話をする必要はないと思っています。しかもカルガリー大学では授業のコーディネーターやホームステイのコーディネーターなどサポートは万全です。）、それ以外にも大切な仕事があります。それは、学生と一緒にエクスカッションに参加し、その内容をチェックし、学生から感想を聞き、関西大学へ報告するということです。おかげで、カルガリーに着いた次の日には時差ぼけで眠い目をこすりながら、馬の背に揺られながら、小一時間山野を散策できました。また、日本スピードスケート代表の清水選手や岡崎選手が夏合宿を行っているカルガリー大学自慢のオリンピックオーバル（学生や大学関係者は無料。ただし、スケート靴を借り

るのにC\$5ほどかかります。)でアイススケートも楽しむことができました。

午前の授業は関西大学の学生を対象に特別に組まれたものであり、きめ細かな指導がなされていました。午後はインターナショナルな授業で、他の国からの学生と一緒に授業を受け、その後学生たちはみんなでダウンタウンへ出かけていたようです。関西大学の学生だけかたまって行動するのではないかと心配をしていましたが、韓国、台湾、ロシアなどから来た学生たちと片言の英語で意志の疎通を図っていました。語学セミナーの最後にFarewell partyを兼ねた修了証書授与式があり、ほとんどの学生が涙を流しながら、先生たちとの別れを惜しんでいました。日本を出る前の不安そうな顔は消え、1ヶ月という短い期間でしたがカルガリー大学での生活を思う存分楽しんだようです。

学生の病気やけが、その他のトラブルなど大変気を遣うことも多かったです。私にとってもいろんな意味で良い勉強をさせていただきました。3週間ほど留守にするに当たり、化学工学科や触媒工学研究室のみなさんに大変ご迷惑をお掛けしましたことをお詫び申し上げます。

植村正先生 ご退職

植村正教授が、平成16年3月末日をもって定年退職されます。昭和36年4月に着任され、42年の大変長きに渡って学部学生や大学院生の教育や吸収式冷凍機やヒートポンプ、食品貯蔵などの研究に多大な貢献をされてきました。心より感謝申し上げます。尚、先生には来年度も、非常勤講師としてご教鞭頂きます。

教室事務 仁村万喜子さんから市原亜希子さんにバトンタッチ

長年教室事務で御世話頂いた仁村さんが、平成15年3月末日をもって入試課に移動されました。就職や生活での悩みなど親身に学生の御世話をして頂き心より感謝致しますと共に、今後益々の活躍をお祈り申し上げます。後任として平成15年4月1日より市原亜希子さんが着任されました。教室や学生の御世話を宜しく願います。

■ 編集後記 ■

第10回同窓会報をお届けします。巻頭言を学科長の室山勝彦教授にお願いしました。ご退職に当たって、植村正教授に御執筆頂き、工学部設立当初の劣悪な教育・研究環境の中、情熱を持って学生と共に研究に励まれていた様子を興味深く拝読しました。「卒業生に聞く」では、植村研ご卒業の砂村梅晴様、坂本一郎様ご両名に御執筆頂き、研究室生活や卒業後のご活躍を拝読しました。藤本理恵様には青年海外協力隊でのエネルギーで情熱を持ったご活躍の様子を頼もしく拝読しました。卒業生の皆様から、関西大学や化学工学科に対し大きな期待が寄せられていました。池永直樹助教授には、本学の語学セミナーの様子を楽しく読ませて頂きました。

ご多忙中ご執筆頂いた方々や広告掲載会社の皆様に厚く御礼申し上げますと共に、皆様の益々のご発展とご健康をお祈り申し上げます。

本学科のHPアドレス [www.cheng.kansai-u.ac.jp]

ジーエルサイエンスの

ガスクロマトグラフ



ジーエルサイエンス株式会社

本社 〒163-1130 東京都新宿区西新宿6丁目22番1号
新宿スクエアタワー30F

【営業部代表】 電話 03(5323)6611 FAX 03(5323)6622
ホームページ: <http://www.gls.co.jp/>

大阪支店 TEL06(6357)5060 北関東営業所 TEL048(667)1611 名古屋営業所 TEL052(931)1761
東北営業所 TEL024(533)2244 武蔵営業所 TEL042(934)2121 京都営業所 TEL075(256)0111
筑波営業所 TEL0298(24)3281 横浜営業所 TEL045(475)1144 広島営業所 TEL082(233)1101
千葉営業所 TEL043(248)2441 静岡営業所 TEL054(288)5252 九州営業所 TEL092(291)5200

オフィス家具・事務用文具

OA・PCサプライ&プリンティング

株式会社 宗石商会

〒530-0044 大阪市北区東天満2丁目10番35

TEL (06) 6353-1841

FAX (06) 6357-7780

E-mail info@muneishi.com

理化学機器
理化学硝子器

赤尾理化学機器

赤尾雄三

〒606-0081 京都市左京区上高野畑町39-10
TEL (075) 701-2729
FAX (075) 701-2740
E-mail: akaorika@mwe.biglobe.ne.jp

測定対象ごとの最適X線回折測定手段を提供...

株式会社 トライ・エスイー
TRY-SE Co., Ltd.

主製品

単結晶の方位測定と解析: ラウエカメラ ラウエ結晶方位解析システム、
結晶方位設定・研磨ジグ/ゴニオメータ
物質の環境変化測定: ガス雰囲気測定 試料加熱・冷却測定 試料ホルダー
粉末X線回折データ解析: JCPDSデータベース 物質の同定解析システム
基本装置: X線回折装置
X線発生装置 X線管(回折X線管 蛍光X線管)
モノクロメータ X線検出器 X線計数計
イメージングプレート 2次元画像測定装置
X線管冷却用循環水装置

事業所 大阪市淀川区木川東3-5-21第3丸善ビル
TEL.06-6368-5135 FAX.06-6368-5136 E-mail: try-se@try-se.co.jp

理化学機械・器具販売

有限会社 東郷商会

守口市寺方錦通三丁目一番二十五号
TEL 06-6999-6192
FAX 06-6999-6192

MIZUKEN

計量証明事業登録 大阪府第10124号

飲料水水質検査業登録 大阪府9水第6-7号

水を科学する

<業務内容>

- ◇水質・大気・悪臭・土壌・産業廃棄物の分析・測定
- ◇ダイオキシン類・環境ホルモンの分析・測定
- ◇環境アセスメント及び申請書類作成
- ◇河川・海域・湖沼等の観測・調査
- ◇水処理装置の設計・施工・管理

株式会社 総合水研究所

〒590-0984 大阪府堺市神南辺町1丁4-6
tel: (0722) 24-3532(代)
fax: (0722) 24-3257
e-mail: mizuken@msb.biglobe.ne.jp

旭テクノグラス特約店・オリンパス顕微鏡特約店・理化学機器全般

株式会社 小倉理化

〒574-0017 大阪府大東市津の辺町2番16号
TEL.072-876-5464
FAX.072-877-0190
E-mail info@ogurarika.co.jp



KING Work's Co., Ltd

弗素樹脂のパイオニア

株式会社 キング製作所

代表取締役 稲垣允久

本社 吹田市泉町5丁目13番9号
〒564-0041 TEL (06) 6389-4176(代) FAX (06) 6387-3049
滋賀営業所 滋賀県彦根市平田町421 NASU 1ビル206号
〒522-0041 TEL (0749) 22-6606 FAX (0749) 22-5245
URL: http://www.king-works.co.jp E-mail: kpf-king@ic.biwa.ne.jp
滋賀営業所 E-mail: sig-king@chive.ocn.ne.jp

平成14年度会計報告

(平成14年4月1日～平成15年3月31日)

化学工学科同窓会

(収入の部)

費目	予算	実行	差額
前 期 繰 越 金	2,765,123	2,765,123	0
入 会 金	101,000	101,000	0
会 費	600,000	650,000	△ 50,000
銀 行 利 子	4,000	1,119	2,881
広 告 費	50,000	90,000	△ 40,000
合計	3,520,123	3,607,242	△ 87,119

(支出の部)

費目	予算	実行	差額
総 会 費	10,000	0	10,000
会 報 費	550,000	474,670	75,330
事 務 費	10,000	486	9,514
通 信 費	10,000	3,340	6,660
卒 業 記 念 品	70,000	36,800	33,200
人 件 費	259,200	289,900	△ 30,700
雑 費	5,000	520	4,480
郵 便 払 出 料 金	0	0	△ 470
小計	914,200	805,716	108,484
次年度繰越金	2,682,125	2,801,526	△ 195,603
合計	3,596,325	3,607,242	△ 87,119

平成14年度化学工学科同窓会会計監査報告

平成14年度の化学工学科同窓会の会計報告書に従って、金銭出納帳について慎重に会計監査を行った結果、平成14年度化学工学科同窓会会計の運用状況は厳正かつ正確であり、その記述内容に相違がないことを認めます。

平成14年度化学工学科 同窓会会計監査委員 飯 田 義 彦

阪 元 勇 輝

平成15年度 予算案

(平成15年4月1日～平成16年3月31日)

化学工学科同窓会

収入	金額	支出	金額
前 期 繰 越 金	2,801,526	総 会 費	10,000
入 会 金	80,000	会 報 費	550,000
会 費	600,000	事 務 費	10,000
銀 行 利 子	1,000	通 信 費	10,000
広 告 費	50,000	卒 業 記 念 品	70,000
		人 件 費	285,600
		雑 費	5,000
		次 年 度 繰 越 金	2,591,926
合計	3,532,526	合計	3,532,526

*入 会：学部卒生 79名

入会率：79/127名 62.20% (入会金内訳：学部生 ￥79,000+M2 ￥1,000)